

桂枝加〇〇湯について

私が最初に勤務した大学病院には日本では初めてという保険が利用できる和漢診療科がありました。当然のように薬剤師全員が生薬の調剤や和漢薬医療に大なり小なり関与していくようになります。色々な漢方処方がある中で桂枝加〇〇湯（〇〇は個別の生薬の名前）があります。桂枝湯をベースにして生薬を1～2種類加えたり増量したりする意味になるのですが、それだけで病態にどのような違いが出るのだろうか興味を持った事があります。今日はその頃のお話になります。

1) 桂枝湯とは

まずベースとなる**桂枝湯**についてですが、エキス剤の適応症を見ますと「**体力が衰えた時の風邪の初期**」に用いるとあります。では誰にでも使って良いのかと言うとそうではなく、その人の体質や症状によって使い分けます。その体質や症状のことを漢方では「証(ショウ)」と呼んでいます。

他の風邪の初期症状で利用される代表的な漢方薬には、葛根湯やインフルエンザの初期にも使用される麻黄湯があります。これら三種類の漢方薬のどこが違うかと言うと、まず発汗作用の強さがあげられます。一般に**麻黄湯>葛根湯>桂枝湯**の順で発汗作用が強いとされています。

風邪の初期では、これらの漢方薬のいずれかを温服して布団をかぶってひたすら寝ておれば、やがてどっと汗をかいて熱も下がり体もすっきりとなる・・・という訳です。

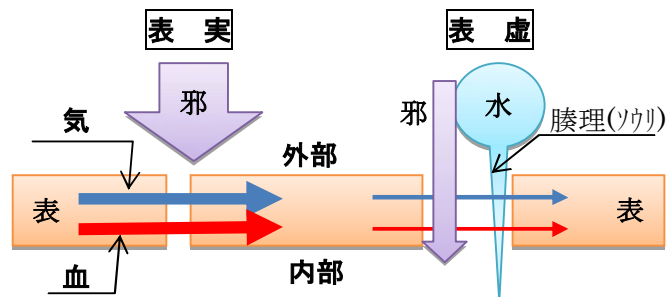
漢方では風邪になる原因を**風邪**(フウゼツ)とか**寒邪**(カンゼツ)と呼んでいます。風邪はウイルスとか細菌とか目に見えない病気の原因とでも考えましょう。寒邪は寒さや冷氣と考えれば良いでしょう。風邪や寒邪を総称して**病邪**とも呼びます。その病邪の勢いを示す言葉に「**邪気**(ジャキ)」があります。

一方、体は体表面が外気と接していますから、体表面が外から侵入してくる病邪への最初の防御部位になります。漢方では体表面を「**表**(ヒョウ)」と呼んでいます。そして表では体の中から発生してくる「**気**(キ)」と「**血**(ケツ)」が循環しており、病邪の体内への侵入を防いでくれています。

ちなみに「気」とは体の機能を維持するための眼に見えないエネルギーであり、「血」とは体を栄養し滋潤する赤色の液体です。

人間には個人差があります。体の丈夫な人もいれば弱い人もいます。風邪を引きにくい人は表の気血の巡りが十分にある人になります。表が充実しているという意味で「**表実**」と呼ばれます。一方、風邪を引きやすい人は表の気血の巡りが十分でないため、たやすく病邪の侵入を許してしまう人になります。表が充実していないという意味で「**表虚**」と呼ばれます。また、表には体内と外界をつなぐ「**腠理**(ソウリ)」と呼ばれる穴が開いています。表を巡る気血の力が強いと腠理の開閉はしっかりと調整されますが、気血の力が弱くと締まりが悪くなります。表虚証の人が風邪にかかった時は腠理の締まりが悪いため体内の水分が少しずつ漏れるような状況になります。これを漢方では「**自汗**(ジカン)」と呼んでいます。しっとり汗ばむ状態とも表現されます。

図左の「表実」は表の気血の力が強く、腠理がしっかりと締まり自汗が無い状態で、また病邪も勢いが強くないと風邪症状を引き起こせない状態を示しています。図右の表虚では表の気血の力が弱く、腠理の締まりも悪くなり自汗が生じている状態で、病邪の勢いが、さほど強なくても体内に病邪が侵入できる状態を示します。



病邪の勢いに差はありますが、表実の人でも表虚の人でも表付近の内外で病邪と体内の気血が戦っている状態が風邪の初期症状になるわけです。

このような風邪の初期症状(発熱、悪寒、筋肉痛等)の治療の基本は、表付近に存在している病邪を追い払う事です。発散させるとも言いますが、具体的には「**発汗**」によって表の付近にいる病邪を追い払います。そこで登場するのが発汗作用を持つ**麻黄湯、葛根湯、桂枝湯**になります。先に発汗作用の強い薬順に並べましたが、使い分けの基準は、まず自汗があるかないかになります。つまり、表実なのか表虚なのかを見極める事になります。そして、表実なら麻黄湯や葛根湯、表虚ならば桂枝湯を選択するのが古来からの方法です。

さて、表虚では既に自汗と称してだらだらと汗が出ています。その状態の時に強い発汗作用を持つ漢方薬を投与すると余計に体力を消耗して良くありません。そこで弱い発汗作用を持つ桂枝湯が選択されます。また、表虚の場合はだらだらと漏れ出た分の水分を補給したり、表自体を保護する必要もあります。桂枝湯に含まれる芍薬は表の気血の巡りを改善する作用もあり、また含まれる大棗や甘草には消化機能を補い気を益し、ひいては水分の生成を促す効果があります。

桂枝湯には自汗で水分が漏れているという状況下でも弱い発汗作用を発揮しながら風邪の初期症状を治す働きがあるという事になります。

高齢者や虚弱な人の風邪用の漢方薬と言えそうですが、私が知る範囲ですが風邪への漢方エキス剤の利用では、ほとんどが葛根湯エキスを選択しており、桂枝湯エキスの利用はかなり稀であるように思います。やはり「発汗作用の弱さ≒効きが悪い」という印象になっているのでしょうか？

ベースとなる桂枝湯の話題が長くなりましたが、次に**加〇〇湯**の紹介に移ります。ちなみに桂枝湯の構成生薬は、**桂皮、芍薬、大棗、甘草、生姜**の五種類になります。

2) 桂枝加葛根湯

桂枝湯の構成生薬に**葛根**という生薬を1種類加えた漢方薬になります。ベースが桂枝湯になりますから、発汗作用は弱く、自汗のある人で後背部に筋緊張のある症状を持つ人が対象になります。

葛根を含む葛根湯は発汗作用が強いのですが、葛根単独では発汗作用がなく、鎮痙して後背のこわばりや痙攣を治す作用があります。エキス剤の適応症には「**身体虚弱な者の風邪の初期で、肩こりや頭痛のある者**」とあります。

3) 桂枝加厚朴杏仁湯

桂枝湯の構成生薬に**厚朴**と**杏仁**の2種類を加えた漢方薬になります。ベースは桂枝湯で自汗のある人が対象で、咳が強い時に利用されます。厚朴はホオノキの樹皮で鎮咳作用があり、杏仁は杏子の種子で鎮咳去痰作用があります。エキス剤の適応症には「**身体虚弱なものの咳**」とあります。

4) 桂枝加竜骨牡蠣湯

桂枝湯の構成生薬に**竜骨**と**牡蠣**の2種類が加わった漢方薬にはなっていますが、この漢方薬を使う時は、もはや桂枝湯の証ではありません。病邪が表から更に奥に侵入した病態になっているのです。そこは「**半表半裏**」と言って、表と裏の中間領域、現代医学でいうと横隔膜に隣接する組織(胃、肝、脾、肺、心臓、肋膜、咽喉、下気道等)に相当すると考えます。適応症も「**体質の虚弱な人で疲れやすく、興奮しやすいものの次の諸症：神経質、不眠症、小児夜泣き、小児夜尿症、眼精疲労**(これらは漢方概念の**腎、心、脾の臓器異常**の症状になります)」とこれまでとまるで違っています。

5) 桂枝加芍薬湯

桂枝湯の構成生薬の1つ**芍薬**が増量になった漢方薬なので、風邪の初期症状に筋痙攣の症状が出たのかと推測したくなりますが、これも病邪の位置が異なり、今度は「**裏**」に達しています。裏とは小腸、大腸、泌尿器や生殖器等と考えてよいでしょう。これまでの漢方薬は冷えを伴わない「**陽証**」と呼ばれる分類でしたが、この漢方薬は冷えを伴う「**陰証**」と呼ばれる分類になります。適応症は「**腹部膨満感のある次の諸症：しぶり腹、腹痛**」とやはりこれまでとまるで違っています。

※その他にも桂枝加〇〇湯はあるのですが、紙面の都合で割愛させていただきます(終わり)。

【参考資料】 寺澤捷年著：症例から学ぶ和漢診療学